

SERGIO MENDES & BRASIL '66 STILLNESS

セルジオ・メンデス&ブラジル'66 スティルネス

1 スティルネス

STILLNESS

(Paula Stone)

2 ライチャス・ライフ

RIGHTEOUS LIFE

(Paula Stone)

3 チェルシーの朝

CHELSEA MORNING

(Joni Mitchell)

4 二人の愛の歌

CANÇÃO DO NOSSO AMOR

(Silveira / Dalton Medeiros)

5 ヴァイラムンド

VIRAMUNDO

(Capinan / Gilberto Gil)

6 ロスト・イン・パラダイス

LOST IN PARADISE

(Caetano Veloso)

7 静かな夜

FOR WHAT IT'S WORTH

(Stephen Stills)

8 冬の日には

SOMETIMES IN WINTER

(S. Katz)

9 日の出

CELEBRATION OF THE SUNRISE

(Tiao Neto / Oscar Castro Neves)

10 スティルネス

STILLNESS

(Paula Stone)

© 1971 A&M Records

*シラリースは、あくまでもオリジナルのジャケット・デザインを尊重して制作しておぼ。曲目記載他、LP発売当時のままで再現している点についてはご了承下さい。

ユニバーサルの詳細情報満載!
http://www.universal-music.co.jp/u-pop/

<取り扱い上のご注意> ●ディスクは両面共、指紋、汚れ、キズ等を付けないように取り扱って下さい。 ●ディスクが汚れたときは、メガネふきのような柔らかい布で内周から外周に向かって放射状に軽くふき取って下さい。レコード用クリーナーや溶剤等は使用しないで下さい。 ●ディスクは両面共、鉛筆、ボールペン、油性ペン等で文字や絵を書いたり、シール等を貼付しないで下さい。 ●ひび割れや変形、又は撥音前後で補修したディスクは、危険ですから絶対に使用しないで下さい。 ●直射日光の当たる場所や、高温・多湿の場所には保管しないで下さい。 ●ディスクは使用後、元のケースに入れて保管して下さい。 ●プラスチックケースの上に乗るものを置いたり、落としたりすると、ケースが破損し、ケガをすることがあります。

1966年に「ハーブ・アルバート・ブレゼンツ・セルジオ・メンデス&ブラジル'66」でデビューした、セルジオ・メンデス率いる“ブラジル'66”。その最後の冒険を記録したのが、1970年に発表された本作。“ブラジル'66”名義での最終作となった「スティルネス」です。ブラジル'66名義では、ライブ盤も含めると通算8作目となります。実は数あるセルメン作品の中でも永らく未CD化だった作品なので、今回のラインアップは快挙といえます。

アメリカに渡り、ブラジル'66を率いての活動を経て、ブラジル音楽とアメリカン・ポップスの融合を目指したセルジオ・メンデス。ブラジル'66は、そんなセルジオの新しい目論見を実現させるために生まれたグループでした。以前、インタビューをした時にセルジオはこう答えてくれました。「新しく出会った素晴らしいメロディの曲や、ブラジルが生んだ素晴らしい曲を、自分流にアレンジしてみたかったんだ。ビートルズ然り、コール・ポーター然り、ステイヴィー・ワンダー然り」。そのあまりにもシンプルな発想を、堂々、エンターテインメントとして表現したのがブラジル'66だったのです。2人の女性ヴォーカルを看板に掲げたグループ編成のスタイルは、今でも珍しくはありませんがセルジオのアイディアで生まれた（なんとなくやってみたら大受けしたんだそうです）、見た目のサウンドもキャッチーなイカしたスタイル。多くのファンローを生んだのは周知の事実です。

かくてセルジオ・メンデスは、ブラジル'66を率いた約5年の間、その時その時、彼の好奇心を促した曲をピックアップして、セルジオ流に料理してきました。結果的に流行りの曲、流行りのスタイルを取り入れる、ということになってはいますが、セルジオ自身は好きな曲を無邪気に選んでいたようです。そんなブラジル'66のサウンドは、ハーブ・アルバートが運営するA&Mというレーベルのカラーにも、おもいっきりドンピシャでした。

結核ハーブ・アルバートを筆頭に、パート・バカラック、ロジャー・ニコルス、ニック・デカロなどがA&Mレーベルから発信したサウンドは、イージー・リスニング・ポップスと換言も可能な、60年代アメリカン・ポップスの“極右”的なサウンドでした（その場合、“極左”は反戦や公民権運動の思想を受け継ぐフォーク・ロックや、ディスカヴァリー・アメリカを旗印にしたワーナー・リプライズ・レーベル作品、“中庸”は純正職業ソングライター集団ブリル・ビルディングの流れを汲む王道…ゴフィン&キング、ボイス・ハート、アンダース&ボンシア…と考えられると思います）。そんなA&Mサウンドは、確かに、商業主義的な色合いが濃いのは事実です。しかし、だからと言って音楽的な質が劣ることはまったくありません。ウェストコースト・ジャズと密接に結びつき、人脈的には実はワーナー・リプライズ・レーベル作品とリンクしていたりもするA&Mサウンドは、洗練を極め、A&Mに間違った才能は、やがて良質なAOR作品を生むことになるのです。そんな背景を踏まえた上で考えれば、元々ジャズ・サンバのピアニストでボサ・ノヴァに精通したセルジオ・メンデスが率いるブラジル'66、A&Mレーベルのために生まれたグループと言っても過言ではないくらい、ドンピシャ、ですよ。

しかし、そんなブラジル'66も、作品を重ねるごとに微妙に変化して行きます。

最も大きな転換期が68年発表の「フル・オン・ザ・ヒル」。指揮するセルジオと看板シンガーのひとりラニ・ホールを除いてメンバーが入れ替り、さらに、前作に当たる「ルック・アラウンド」にも関わっていたデイヴ・グルーシンのこのアルバムからオーケストラ・アレンジで全面参加、ブラジル'66のサウンドをよりゴージャスなものにしました。この時代のデイヴ・グルーシンのこのアルバムについて「僕セルジオ・メンデスはこんなふうには思っています。『僕

がリズムやメロディなんかのトラックを作り、デイヴがオーケストラをつける。僕達はそれを“スウィートニング（砂糖でデコレートするみたいに甘くする）”と呼んでいた。A&M時代には、そんなやり方を学んだんだ。そんなデイヴとの蜜月は69年発表の「クリスタル・イリュージョン」で最高潮に達しました。翌70年発表の「イ・ミ・リ」では、デイヴ・グルーシンがオーケストラ・アレンジで名前を連ねているものの、セルジオが言うところの“スウィートニング”は決して過剰ではなく、オスカー・カストロ・ネヴィスのギター、ドン・ウン・ホマオンとルーベンス・パッシーニのパーカッションなど、グループの演奏を活かしたオーセンティックなサウンドを展開しています。そして、日本で1970年に行われた万国博でのライブ盤「ライブ・アット・EXPO'70」を挟んで、71年に発表されたのが、ブラジル'66名義での最終作でもあり、セルメン・サウンドがまたまた大きく転換した、「スティルネス」というアルバムなのです。

★
まずこの「スティルネス」というアルバムでは、「フル・オン・ザ・ヒル」以来のメンバー・チェンジが行われているようです。クワジットを見てはハッキリとしない部分もあるのですが、スリーヴの写真には、新メンバーが写っています。

セルジオ以外でデビュー以来の唯一のオリジナル・メンバーとなるラニ・ホールがグループを脱退、代わりに、やはりセルジオが指揮していたポップス・プロジェクト、ボサ・ヒョ（ボサ・リオ）のヴォーカリスト、グラシーニャ・レボラーセが迎えられています。ただし、ラニ・ホールはレコーディングには参加していて制作の途中、もしくは終了後に脱退したようで、本作ではまだラニの歌声がかなりフィチュアされています。

それから、ドラムスのドン・ウン・ホマオンの顔もありません。代わりに、クラウチオ・スローンと、本作ではさらう一人のパーカッショニスト、ラウヂェル・ソアレ・ヂ・オリヴェイラが写っています。クラウチオ・スローンはアメリカでセッション・マンとして活躍していたパーカッショニストで、アントニオ・カルロス・ジョビン「波」（ユニバーサル）、マルコス・ヴァーリ「サマー・サンバ68」（ユニバーサル）、アストラッド・ジルベルトの一連の作品のほか、エイジズ「ベイジズ」（EPIC）やミニ・リパートン「ミニ」（CAPITOL）などのメロウ・グループ名義に名を連ねていたりします。それから、ラウヂェル・ソアレ・ヂ・オリヴェイラは、あのジャズ・ロックからAORに転じたシカゴのメンバーだったこともあるパーカッショニスト。「ベイビー・ドント・ストップ・ミー」、「サムホエア」、「パイレーツはシカゴじゃない」、「知るもんか」などのメロウ・グループ名曲をマルコス・ヴァーリ、リオン・ウエと共作で生んだ人物でもあります。上記の4曲は原に、リオン・ウエ「ロッキン・ユー・エターナリー」（WEA）、同じく「夜の恋人たち」（WEA）、残る2曲はマルコス・ヴァーリ「ヴォンターヂ・ヂ・ヘヴェル・ヴォセ」（ボンバ）に収録されています。

残る「フル・オン・ザ・ヒル」以来のメンバー、ツイン女性ヴォーカルのもう一人であるカレン・フィリップ、ベースのセバスチャン・ネット、パーカッションのルーベンス・パッシーニはそのままで変わらず。サポートでは、お馴染みオスカー・カストロ・ネヴィス（ギター）と、アメリカンセッション・マンが数人、参加しています。

そうそう、デイヴ・グルーシンの名前もここにはありません。代わりにオーケストラ・アレンジを手掛けているのはトーマス・W・スコット。トーマスは、表題曲でフルートも自演しています。

★
さて、そんな顔ぶれでセルジオが目指したサウンドとは？
発売当時にこのアルバムを耳にしたブラジル'66フ

ァンは、冒頭を飾る表題曲「スティルネス」、続く「ライチャス・ライフ」を聴いて驚いたことでしょう。どちらもパウラ・ストーンという人が書いた曲ですが、フラワー・ムーヴメントの香りも漂うフォーク・スタイル。時代背景を考えると、どうやらセルジオ、スウィートなイージーリスニング・ポップとは対極に位置するフォーク・ロックや、注目を集めはじめていたシンガー・ソングライターたちの作品に感化されていたようです。

続く「チェルシーの朝」はアメリカの女性シンガー・ソングライター、ジョニ・ミッチェルのナンバー。ただしこの曲ではラニ・パーカッションを元々良く聴かして、今までのブラジル'66の流れを汲んだキャッチーなアレンジに仕上げられています。セルジオのピアノも聴かれています。

「二人の愛の歌」はシウヴェイラ＝ダウトン・メデイロス作の落ち着いたMPBナンバー。タンバ・トリオによる演奏（66年作の「タンバ・トリオ」に収録）でも知られている曲です。歌っているのは男性ヴォーカルですが、歌ってのはセルジオ自身のようです。前作「Ye-Me-Le」ではドリ・カイーミの「あなたはどこから？（ホエア・アー・ユー・カミング・フロム？）」を歌っていたのもセルジオだと思えますが、この頃彼は、アルバムに1曲、自分で歌うブラジルらしい曲を入れていたようです。「二人の愛の歌」は歌詞がポルトガル語ということもあって、このアルバム中、最もブラジリダーチを溢らせています。

「ヴァイラムンド」はジウベルト・ジウ（ジルベルト・ヴィラ）がデビュー・アルバム「ロウヴァサオン」の中で歌っていたナンバー。サンバ～マルシヤ系のリズムを基調としながらもジャズっぽいアレンジでオシャレに聴かせるのはブラジル'66流マジック。終盤のスクエットもいかんじです。

「ロスト・イン・パラダイス」はカエターノ・ヴェローゾ作の英語歌詞曲。「静かな夜」はアメリカのシンガー・ソングライター、ステイブ・スティルスの曲。「冬の日には」はアメリカのブラス・ロック・バンド、ブラッド・スウィート&ティアーズの演奏で有名なナンバー。この3曲もフォーキー路線ですが、後者の2曲はファンキーなテイストがうねっています。とりわけ「冬の日には」はブラジリアンも入った71年らしいメロウ・サウンドで、キーボードの音色なんかはCTIでのデオダートの仕事に影響を受けているようにも聞こえます。終盤、ボサ風味、ソフト・サイケ風味が絶妙に混じった、まさにブラジル'66っぽい展開を見せて盛り上がる、大作です。まさにこのアルバムのハイライト。

「日の出」はセバスチャン・ネットとオスカー・カストロ・ネヴィス作。これは男女混声ヴォーカルによるダバダバ・スクエットをふんだんにフィチュアしたフォーキー・ブラジリアン。うーん、尺が短いのが残念！

最後は表題曲「スティルネス」が再び登場して、おしまい。いかがでしたでしょうか？ 或る意味、71年当時のアメリカン・ポップス～ロック～クロスオーヴァー・サウンドの混沌とした空気がそのまま反映した作品だと言えると思うのですが、この作品でブラジル'66というプロジェクトに終止符を打ったセルジオは、さらなる新しい冒険へと向かいます。続きは、次作となる「ブラジル'77の最初の作品「バイス・トロピカル」にて！

Julho 2002 麻生雅人